

研究テーマ	「想い（発想・想像・構想）を広げ、深める力を育てる授業の工夫」 小学校5年生「色を重ねて、ゆめを広げて」の実践を通して
-------	--

桜川市立雨引小学校 教諭 小河原 範子

I 研究テーマについて

1 学習指導要領から

図画工作科の目標は、「表現及び鑑賞の活動を通して、感性を働かせながら、つくりだす喜びを味わうようにするとともに、造形的な創造活動の基礎的な能力を培い、豊かな情操を養う。」である。ここで言う「基礎的な能力」の1つに、「発想や構想の能力」があり、具体的には「形や色、イメージなどをもとに想像をふくらませたり、表したいことを考えたり、計画を立てたりする能力」である。それは、児童が自己との対話を重ねながら、他者や社会、自然や環境などの多様な関係の中で活動することによって培われる。児童の資質や能力は、活動そのものに表れることが多い。そのため授業においては、児童の活動そのものを見取り、次の授業実践にどうつなげていくかを見極めていくことが大切であると考えます。

また、今回の研究テーマに係わる5・6年の目標の1つに「材料などの特徴をとらえ、想像力を働かせて発想し、主題の表し方を構想するとともに、様々な表し方を工夫し、造形的な能力を高めるようにする」がある。ここで述べられている「主題の表し方を構想する」とは、おおよその計画を立てたり、つくりながら順番や組み立て方を考えたりすることととらえた。

子供たちが製作に当たって自分が「どんなイメージをもっているのか」とか、「何を思い描いているのか」とか、「どんな風に表現していきたいのか」を明らかにしていく授業を組み立てていくことでテーマに迫っていくことにした。

2 研究の目的

「色を重ねて、ゆめを広げて」の授業の実践を通して、児童の発想する力、想像する力、構想する力を広げ深める授業の在り方を探る。

3 研究内容

(1) 題材の工夫

これまでの学習を見直し、自分の思いや自分らしさを自由に表現できるような「表現対象」を設定する。「自分」を題材として取り上げることで、児童達には鏡に映った「自分」を思うままにじっくりと見つめるようにさせる。また外見だけでなく内面的な「今の自分の想い」「心情」が鏡の中でどう表れているかを確かめさせる。鏡の位置を工夫し、自分の「今の自分の想い」がよく表れる「構図・視線」を納得いくまで検討させる。そうすることで児童が失敗を恐れず自分の「想い」を伸び伸びと表現していく力を育てていきたい。

(2) 鑑賞の工夫

製作の終末だけの鑑賞会でなく、製作の途中で何回か意図的に「自他の作品をみる時間」を設定する。導入時に先人の自画像作品や以前の他の多色刷りの児童作品の「鑑賞」、版画の下絵の段階、版を彫っている段階、印刷をしている段階での「ミニ鑑賞会」、終末の「作品発表会」を行う。そうすることで児童の自分の活動に対する自信や満足感、学び合いによる活動意欲を高めていきたい。

(3) 支援の工夫

発想の広がりや役立つような未完成の作品例や、児童のイメージがふくらみ、製作活動の見通しのもてる資料を適宜提示する。また、一人一人の児童の興味や関心・発達段階に応じた支援をしていく。児童が思いついたことを自由に試せる活動場所や用具を準備しておく。彫ったり刷ったりしていく段階での予想されるつまづきに対しては、対処の方法を紹介しておく。そうすることで、失敗することを恐れない伸び伸びとした児童の発想力や構想力を育てていきたい。

II 研究の実践

1 題材名 色を重ねて、ゆめを広げて

2 題材の目標

自分と向き合い、自分の思いを大切にしながら線と色の構成を工夫し、「自画像」を木版に表す。

3 題材について

(1) 児童の実態

この時期の児童は、筋道を立てて表現したり対象に対して社会的な意味づけをしたり、作品を分析的に鑑賞したりできるようになる。また、一人一人の特性や傾向がはっきりしてきて、自分らしい主題で表そうとする傾向が強まってくると同時に、客観的に自分の活動を見ることが少しずつできるようになる。また、人に見せることを意識するあまり作品に素朴さが失われがちにもなる。一方、手順が分かり好奇心を刺激し、自分らしさを出せるような題材に対しては各自が主体的に見通しを立て製作に没頭したり、友達と活発に交流し合う様子もみられる。本学級の児童は昨年度、彫刻刀を使って初めて木版画の作品をつくった。また、一学期で学習した「糸のこのドライブ」では、

電動糸のこぎりで板の曲線切りを楽しみ「伝言板」という用途をもったものをつくる学習をした。ほとんどの児童が自分の活動に自信をもって取り組んだが、自分の考えをまとめたり、構想したりする力に個人差があることも分かった。

(2) 題材観

この題材は、自分の思いを大切にしながら構想を広げ下絵を描き、線彫りによる版づくりをし、どう配色するかを考え、徐々に刷っていく活動を通して、「感じたこと、想像したこと、見たことから、主題を構想し、様々な表し方を工夫して表すこと」を重点的な目標とした学習である。また、テーマを「自画像」とし、自分らしさを自由に表現できるような授業にしていこうとすることで、社会的な話題や、流行の形や色などを作品に反映させ、周りの社会と広くコミュニケーションをとれるようにし、社会と豊かにかかわる態度を育てることもねらっている。

(3) 指導観

本題材では、活動の流れや一版多色刷りの手順の資料を提示し、配色や発色、色合い、版のつくり方、刷り方がよく分かるようにしておき見通しの立った活動ができるようにしていく。本刷りの前に黒い用紙に絵の具で刷るとどう発色するかを納得いくまで試したり、自分の思いがしっかりと表現できるまで重ね刷りをする中で、各自の工夫が生かせるようにしていく。また、「自画像」というテーマをふまえ、内面的なことを色や形でどのように表現していくと相手に伝えることができるのかも考えていかせる。下絵の段階で「今の自分の心情」を自分の言葉で下絵にメモさせ、意識させていきたい。精神的にも身体的にも一層充実してくる時期なので、活動する喜びを十分味わえるような題材に取り組むことで、つくりだす喜びと成就感、満足感を味わわせたい。

4 題材の評価規準

関心・意欲・態度	発想や構想の能力	創造的な技能	鑑賞の能力
一版多色刷りの方法を理解し、刷り進むごとにできあがる過程を楽しんでいる。	自分の表したい主題に合った構図を考え、自分らしい配色の工夫を考えている。	発色の効果や刷る順番を考えて、主題に適した配色や刷り方を試したり、工夫しながら作品をつくらせている。	彫った感じや刷り上がった感じを味わったり、自分や友だちの表現のよさやおもしろさを感じ取っている。

5 指導と評価の計画（8時間扱い）

時間	学習内容・活動	評価規準・【評価方法】
第1次 ②	多色版で表すおもしろさやよさに気づき、表したいことを楽しく想像する。 鏡に映った自分を見て、表したいことをスケッチに描く。	- さまざまな多色版の作品例から、版の良さを生かして楽しく表そうとしている。 関【観察】 - 鏡に映った自分を見てひらめいたり、感じたりしたことから想像し、イメージをふくらませている。 想【観察・下絵】
第2次 ②	スケッチをもとにして表したいことがよくわかるように、工夫して板を彫る。	彫りたい感じに合わせて彫刻刀を選び、彫りながら想像を広げたり工夫したりして彫っている。 創【観察・版木】
第3次 ③	表したいことに合わせて、色の組み合わせ・重ね方・発色を工夫して印刷する。 (本時は③-1)	表したいことに合わせて、絵の具の色や重ね方を工夫して刷っている。 創【観察・作品】
第4次 ①	自分の作品の見所や、友達の作品の表現のおもしろさを伝え合う。	- 製作に対する自分の思いを発表することを楽しもうとしている。 関【作品・発言】 - 友達の作品の表現のおもしろさや感じ方の多様さに気付いている。 鑑【観察・発言】

6 指導の実際

(1) 目標

表したいことに合わせて、効果的な配色を考え工夫して印刷することができる。

学 習 内 容・活 動	指 導・支 援 の 手 立 て と 配 慮
1 本時の課題を確かめる。 色の組み合わせを工夫して印刷しよう。	・本時の活動に必要な用具類が机の上に使いやすくそろっているかどうか確認するように説明する。 ・一人一人に自分の意図している全体像をイメージさせ、これからの製作に対する意欲が高まるよう支援する。
2 印刷の準備をする。 (1) 材料、道具を確認する。 (2) 版遊びをする。	・刷る紙は何度もまくる作業を繰り返すので、版と用紙を粘着テープでしっかりととめるように呼びかける。 ・バレンの扱い方については、方向、動かし方、力加減を実際に教師がやって見せて参考にさせる。 ・今回は、発色と使いやすさを考慮し、みんなで使えるポスターカラー（白）を学校で用意しておく。 ・黒い紙に対する色々な色の発色のしかた、絵の具に加える水の量、一回に印刷できる面積の限界、重ね刷りの効果、混色の効果を、自由に試すように助言する。
3 印刷する。 (1) 刷る順番を確認し刷り始める。 (2) 途中経過の鑑賞をする。	・色作りがうまく進まない児童には、見本をいくつか示したり、児童の思いや意図を問いかけ、それに合った方法を具体的にアドバイスする。 ・色の濃淡による重ね刷りの美しさに気づかせ、作品に取り入れていくよう助言する。 ・版画の持ち味である、「かすれのよさ」「もう一枚できる」ことなどを助言し、考慮しながら製作を進めるように話す。 ・本題材のコンセプトである「自分の思い」が作品に表現されているかどうかチェックしながら製作を進めていくように助言する。 ・小グループで活動することで、互いの製作活動やユーモアを刺激とさせ、また新たな発想が浮かんだ時は随時取り入れていくよう声をかける。 ・特におもしろい活動をしている児童には、自分の活動の工夫点を発表させることで、互いの活動や発想を刺激したり、教え合いができるようにしていく。 ㊦ 自分の思いに合った配色イメージで印刷を進めていくことができたか。 ㊦ 【観察・作品】
4 本時のまとめをする。 (1) 自己評価をする。 (2) 次時の活動内容を確認する。	・自分の計画に沿って意欲的に製作を進めたことを称賛し、成就感がもてるようにする。 ・本時の学習を振り返り、足りなかった点は次時のめあてにするように話す。

Ⅲ 研究の成果と課題

1 成果

(1) 題材の工夫

① 自画像であること

- ・自由にポーズや表情を試してから構図を決められたり、鏡の中の自分を見つめる時間が十分とれりできるので、「表現したいこと」を深めることができた。
- ・「下絵」の段階から、作品に対する「こだわり」や「思い」をもつことができた。
- ・「自分の外見」を客観視でき、更には自分の内面に問いかけることができ、興味を持続させながら授業を展開することができた。



「先人の自画像作品のコピーを見て」



「鏡の中の自分を見つめる」
「自分らしさを出すには・・・」



「自分と向き合う」
「自分の外見はどうか・・・」



「自分と向き合う」
「自分の思いが出せてるかな・・・」

②多色刷りであること

- ・「版画」であるということ（2～3枚印刷できる）、児童が試行錯誤する場を保障することができ、そのなかで感じたことからイメージを広げていけるようにしたことは発想を広げることが苦手の児童にとって有効だった。
- ・多色刷りによる色彩の組み合わせや重ね方では、一人一人の児童の自分らしい表現が多岐にわたって実践できていた。偶然による個性的な作品づくりにつながった。
- ・子どもたちは「黒い紙に印刷する」ということで普段と違った「思わぬ発色」「味わい深いかすれ」に驚き、積極的に自分らしい表現に挑戦する姿が見られた。



「一版多色刷りの作品を見よう」
「これは版画なの・・・」
「色がきれいだね・・・」
「自由だね・・・」



「作品展」

③全体的に

- ・考えたことを「文字」や「声」で表現しなくても「色や形」で表現する楽しさを味わうことができた。

(2) 鑑賞の工夫

- ・「全体」「グループ」「自由」の形態で「ミニ鑑賞会」を随時実施した。
- ・導入時は、全体で行い、活動の見通しをもつことができた。「下絵」「彫る」「印刷中」はグループ内鑑賞と自由鑑賞の形態をとった。お互いに率直な意見交換や学び合い、認め合いができ、自分の活動に自信がもて更に工夫していこうという意欲が高まっていた。楽しい雰囲気の中で活動を進められイメージを膨らませていくのに効果的だった。友達の工夫の良い点を自分の「自画像」にも取り入れていこうという態度も見られた。
- ・完成後の「作品発表会」では、一人一人の児童が作品について自信をもって説明することができ自分の活動に満足感をもつことができた。



「ミニ鑑賞会・1」



「ミニ鑑賞会・2」



「自分の工夫をみんなに伝える。」



「友達の工夫をどう生かしていこうか・・・」



「作品発表会・1」



「作品発表会・2」



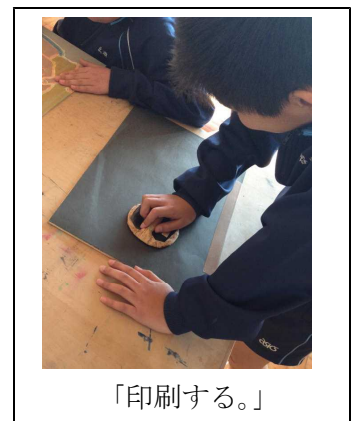
(3) 支援の工夫

- ・手の止まってしまった児童には「何をやってみたいのか」を個別に問いかけ、共感しそこまでの活動を認めていくことで積極的に活動に取り組むことができた。
- ・「一版多色刷り」の版画は未経験な題材だったが、製作の手順を提示しておくことで、各自が自分の製作の見通しを立て、自分のペースで思いついたことを表現することができた。
- ・予想されるつまずきの対処法を明示しておくことで、思いついたことをのびのびと「自画像」に表現することができた。

(掲示物)

一版多色刷り版画の注意事項 (こつ) ※「こつ」を生かして自分らしくつくってこう。				
①下絵を描く ・四つ切りが用紙に板の大きさの枠を描こう。 ・別紙参照 ・形を単純化、強調し4Bで描こう。 ・はみだしを気にしない。 ・枠取りを変えても良い。 ・少し斜め、左右非対称にして自分のきもちを出そう。	②彫る ・彫刻刀は鉛筆を持つように握る。片方の手は、彫刻刀にそえよう。 ・黒板にむかって彫る。(板を回す) ・線を彫るときは、うどんのように長くくっきりと彫ろう。 ・下書きの線の外側を彫ろう。 ・小丸刀・三角刀の2種類を使ってみよう。 ・彫ったあとの木くずは丁寧に切り取ろう。 ・カタツムリの速さでコントロールしながら彫り進もう。	③印刷の色作り ・白色のポスターカラーを使ってみよう。 ・その色に白色を混ぜて発色を確かめよう。 ・絵の具の濃さは「ドレッシング」位がやりやすい。マヨネーズ状は濃すぎる、ジュース状は薄すぎる。 ・混ぜた色はたっぷりつくろう。(パレットの広い部分で作ると便利) ・混ぜる時にしっかりと混ぜよう。 ・やまとのりを混ぜると、発色が良くなる。しかし、板と紙がくっついてしまわないよう気をつけよう。 ・色は、現実と違っても良い。自分の内面を色で表そう。 ・暗くしたい場合は、藍色を使うと良い。	④印刷の刷り ・ばれんは、3回位(ずれないように)くるくると回転させてさっとかけよう。 ・黒い紙と版木がずれないようにしよう。 ・右利きの場合は、開いたときに黒画用紙が左、版木の右にパレット ・中筆、小筆を2〜4本使うと色にのりません。 ・版木に少しずつ色をつけ、すぐにパレンでかける。これを繰り返そう。 ・一回に行う印刷の面積は、500円玉3〜4個分ぐらいの面積がやりやすい。 ・刷る順序は、(肌→服→髪→目→その他) ・または、(広い部分→狭い部分) ・黒い点々が残るのは良いこと。味わいがあります。 ・背景は、黒のままでも味わいがあります。	⑤台紙に貼る ・黒い紙を板からはずし、刷りの具合によっては、周りを少しカッターでカットする。 ・台紙に作品をはろう。 ・名札をつけよう。

- ・上記の①から④までの未完成の作品例を提示しておくことで、作品の方向性を固定化せず、思っていたやりたいことを見通しをもちながら試し、自分の作品に生かしていくことができた。
- ・黒い刷り紙に対しての絵の具の発色を納得いくまで試せる場の設定をしたことで、自分の表したい色にするための絵の具、水の量、刷る順番などを各自が追求することができた。



2 課題

- ・本題材で一番個性が表れる反面、困難でもあるのは、「印刷する」段階であることは予想がついていたが、やはり児童の思いえがいた通りにできあがらなかったものもあった。児童の「思い」を実際に版画として表す場合「単純化」が大切である。構想の段階で印刷段階まで見通した適切な助言の仕方を研修していくことが望ましかった。
- ・授業時数が少ないので、児童の興味関心にマッチし、一題材で色々な観点を見られるような題材を開発していく。
- ・絵画的な分野でも「構想メモ」等のワークシートを活用し、イメージを言葉で書き込むことで、テーマを明確にし更に納得のいく製作活動を目指したい。

参考文献

「小学校学習指導要領解説 図画工作編」
「やってみたいな、図画工作題材集 絵画」

文部科学省 平成20年8月
開隆堂 2007年9月

